

令和2年度 第1回教育課程編成委員会 議事録

日時：令和2年10月29日（木） 午後3時10分～午後4時10分

場所：5階カンファレンスルーム

出席者：教育課程編成委員A 看護職能団体代表

B 看護学科実習施設管理者

C 介護福祉学科実習施設管理者

D 看護学科卒業生

E 介護福祉学科卒業生

学校教職員F～J 書記：介護福祉学科教員

欠席者：介護福祉士職能団体代表者

1. 校長挨拶

世界的なコロナ禍で日常生活、社会生活、学校生活が大きく変わり、通常の学習ができなくなった。学習方法だけではなく学習のねらい、目標を再構築する機会ともなっている。新しい生活様式に合った学校運営を取り入れて学生達が入学時の志を貫き、卒業してからも愛校心と誇りを持てる学校を目指していきたい。コロナ禍を経験した社会の中でこれから求められる看護師、介護福祉士の素養についてのご意見を賜り本校の教育内容について忌憚ない意見交換をお願いしたい。

2. 委員紹介

3. 議事

令和2年度教育課程編成に基づく運営状況について（中間報告）

【看護学科】

H：資料Iを参照、説明する。

【介護福祉学科】

I：資料Iを参照、説明する。

議長：中間評価からの質疑応答

B委員：コロナ禍で実習ができていない学生は、卒業して新たな職場に入るときの不安を感じていることはないか。

J：学生はすごく不安を感じている。学内実習になり、一生懸命患者役になったり演じたりしていたが実際の患者のところに行っていないため、「就職したらどうしよう」という不安を感じている。

L：学生によっては、タイミングよく昨年12月から領域別実習が始まっており、病院での実習ができていない学生も何人かいる。4月5月はほぼ病院実習ができておらず学内実習になっている。また、学生によっては1、2回しか病院実習に行っていない者がおり、卒業前練習などを考えていかねければならないと思っている。

F：学生も確かに不安をもっているため学校としても何とかしたいと思っている。今年の卒業生は何かにつけ現場から「これもできていない。あれもできていない。」と言われるのではないだろうか心配している。国家試験が終わった後、卒業までの期間に技術など補強をしているが、特にこれだけは押さえて出てほしいというところを教えて欲しい。

A委員：このような現状であることは理解している。入職してくる学校によっては全く実習に出ていないところもある。当院の場合は3年生の実習を2週間延ばして基礎実習を行うこととした。不安である気持ちはみんな一緒に仲間であるということ伝えていく。このような状況の中であるため職員に対し、特に2年目になる職員にそのことを理解させるようにしている。全面的にサポートをしなければならないという体制をプログラムに組み込むように動いている。

今年度の新人に関して、困っていることがある。国家試験には通ってくるがその時に単に覚えるだけで根拠づけで覚えていないため物事を考えないで行動を起こしてしまい、それがインシデント、アクシデントに繋がっている。根拠づけで覚えておかないと国家試験が終わってしまうと忘れてしまう。国家試験の問題は覚えているが少しそこからずれると答えられなくなる。復習を学内でしていただいて入職したら現場でもいろいろと考えていきたいと思う。しかし、社会に出たら、自立はしていかなければならない。そこをどうバックアップしていくか。社会人としてどうかということも時間がかかる。

B委員：どのような教育、カリキュラムを組んでいくのか。新人だけではなくて今この状況下で入ってきた人を支えな

いといけないということで院内における教育者の方も育てなくてはならない。管理者は新人教育、教育者の育成などを合わせて今の体制が組まれている。

F：学校では、国家試験合格100%を目指すために国家試験過去問を繰り返しやらせるという意見が法人の中ではある。繰り返したただやるだけでは覚えてしまう。覚えるのではなく解けない問題はテキスト、振り返りで理屈をきちんと解ったうえでもう一度チャレンジして正解を解くということを指導するとなっているのだが、学生はなかなか理解できないという声上がる。どのように勉強したらよいか。

E：実習中にわからないところは自分で勉強し患者を通して疾患の理解を深めていた。患者や指導者の話を聞き勉強していくという形で自分は覚えていた。それでも足りない部分はあると思う少しずつこういった方法で覚えていった。

過去問に関しては、間違えた問題を書き出してそれを何回も実習に行く間に、説明文を読むようにしていた空き時間や思い立った時に読んだり問題を解いたりを繰り返しおこなっていた。

A委員：文章を読むといったが、読む力、最後まで文章を読まない人が多い。覚えているから、途中で文章を読まなくなる。文章をすべて読まず予測して理解ができていない。国家試験でも問題を最後まで読んで意味が解って答えないと覚えただけではだめである。その癖をつけないと現場に出て実際に間違いがおこっている。最後までしっかり読む、最後まで人の話を聞くとといったことを繰り返しおこなっていくと「丁寧」につながる。「丁寧」でないと仕事は早い がインシデント、アクシデントとなっている。

議長：介護福祉学科、中間評価からの質疑応答

D委員：学生は数値目標があり国家試験を合格すれば良いという考えで勉強するとそこには理論が存在していない。そうなると現場に出たときに困ってしまう。なぜAというものがBなのかという根拠やAがBになるまでの理論を自分の中で把握できているかということ介護福祉学科の基礎学力が低い学生にいうのは酷なのではないかと思う。

A委員：大変だと思う。現場にでてくると図式化して説明すると理解できる人一言説明しただけで理解できる人様々だが個人個人努力はしている。方法論は大切だが、私たちも柔軟に対応していかなければならない。「当たり前」ではなくいろいろな工夫をしてその人をみんなが理解をしていくこと。その個人をよく見ていくことをしないと難しいと思う。プリセプターも途中で変われるように柔軟に対応できる体制である。いろいろな人がいる中、私たちが変わっていかないと相手は変えられないため、教える側が変わっていくことが必要。

K：介護福祉学科の非常勤講師より昔とレベルが違いすぎて社会人・留学生・新卒とだれに合わせて講義をすればよいのかとよく言われる。留学生・社会人・新卒の中で新卒の学生たちが理解をできるといところは考えてはいるがなかなか社会人の学生はそこでは物足りなさを感じている。もっと厳しくという意見もある。どこに焦点を合わせていけばよいのか悩んでいる。

介護現場の層がこういったものになっている。技能実習や学校から卒業したばかりの留学生がいるような時代でそこに新人教育をしていかなければいけない。その縮図が今学校にあるのではないかと考えている。学校にいる社会人は現場に出ていけばまたそういった社会が待っているため、ここでいろいろ慣れた事が活かせるのではないと思う。

A委員：学校もそうかもしれないが現場もそうである。新人に差がある。出てくる学校もカリキュラムも違う、同じ国家試験でも、経験者もみんな一緒に一列に並ぶことになる。かなりの差はあるがここに入ったら一定の線引きはする。その中でチームを組んでみんなで支えあっていたが、ついてこれられない人も出てくるがそこに合わせるとこんなはずではなかったと、レベルが低いことに対して退職をするものが出た。その退職者の言葉は次に活かさなければならぬといけない。そこで、チームの中で飛びぬけている人は遅れている人を支えること。一人でも欠けさせてしまうとチーム医療ができなくなるということを徹底したら退職者は0であった。チーム内の差はあるが当院のレベルはここというものを明確にしてそこについてきてもらう。病院としてのレベルは下げない。脱落するものがいればそれはチームの問題。授業でもこのレベルで話す。ついてこれるように努力するのは個人の問題。

議長：C委員意見

C委員：看護も介護も最終目的は資格取得である。思い浮かぶのは暗記だが、暗記ができれば社会に適応できるということではない。介護士の仕事の仕方を「思いだけで仕事をする」というDrがいる。思いというものは人それぞれである。思いをもっているのが悪いというわけではないが、ある人は「介護士は勘と経験で仕事をする」という。そういうことを問題視されているところもある。資格取得という上にもどのような土台を創っていくか理論構築してゆくか専門職であるため専門の知識や技術を身につけなくてはならないがそれは社会に出てか

らではないかと思う。そこまで学校に負わせてしまうのは酷ではないかと思っている。学校では資格をしっかり取ってもらうことではないかと思う。

: その他の意見交換等

特になし

: この計画を引き続き後期教育計画に基づいて運営していくこととしてよろしいか
全員一致で承認される

議事について、全員一致で承認

司会：第2回教育課程編成委員会は来年2月の開催の予定である。